書評と紹介

ボリス・グロイス著、河村彩訳『ケアの哲学』

（人文書院　2023 年）

安　野　　直

近年、ケアにたいする関心が高まりつつある。日本においても、ケアの思想の今日的展開に大きな影響を与えた記念碑的著作であるキャロル・ギリガンの *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development*（1982）の新訳が 36 年ぶりに刊行された[(1)]。文学研究の領域では、作品テクストをケアの視点から読み解く試みがなされつつある[(2)]。こうしたケアの思想の興隆の社会的背景には、新自由主義に起因した自己責任論の跋扈、コロナ禍によるエッセンシャルワーカーへの注目などがあると思われる。ケアの思想は、依存を許さず自立や自己責任を強いる社会の趨勢に対して、人間のもつ「脆弱さ」を擁護する試みとして位置づけられるものであろう。ケア論に一石を投じたギリガンはフェミニズムの立場から、「女性の道徳的弱さは、一見とりとめなく混乱している判断にあらわれるのだが、この弱さが女性の道徳的な強さ（すなわち、人間関係や責任に対する圧倒的な関心）と分かちがたくむすびついている」[(3)]とし、これまで貶められてきたケアの倫理の価値を救い出してみせた。

こうしたケア論の流れのなかにあって、『ケアの哲学 *Philosophy of Care*』のユニークな点は、グロイスがみずからの理論を彫琢していく際に、彼自身が美術批評家であることが大きくかかわっていることである。一例を挙げるなら、博物館や美術館などで収集品の管理をおこなう専門職である「キュレーター curator」は、「治療 cure」あるいは「ケア care」と同じ語を語源にもつこと

をグロイスは指摘しつつ、芸術作品をケアする職として、キュレーターを位置づけている（141）[4]。

しかしグロイスは、博物館でのケアのみを論じるのではなく、ニーチェやハイデガー、アレント、フョードロフ、ボグダーノフらの思想を見事な手つきで読み替えながら、より広範なケア論を構築してみせる。ここで、グロイスによる思想家の解釈が妥当であるか否かを吟味することは、書評子の手にあまる。そこで以下では、グロイスが提示する「ケア」と「セルフケア」の対立構造を指摘したのち、評者の関心の中心であるジェンダー研究の立場から、本書のもつ議論の射程の広さを素描してみたい。

グロイスのケア論のなかでキー概念となるのが、「象徴的身体 symbolic bodies」[5]である。これは、われわれの生身の肉体である物理的身体とは異なった拡張された身体を指す概念であり、具体的には身分証に記載されている個人情報（性別、生年月日、出生地、住所など）や医療カルテ、個人の著作物、さらにはSNSなどのアカウントまでをも含む。この拡張された身体である象徴的身体を成立させる各種システムが、グロイスの言う「ケア」である。しかし、グロイスの「ケア」は、正義の倫理にたいするケアの擁護や、新自由主義批判としてのケアといった、従来のケア概念の使われ方とは全く異なった意味を有している。こうしたグロイスのケア論の特質を、福嶋亮大は「「やさしくない」ケア論」と的確に言い表している[6]。

グロイスの「ケア」概念は、「セルフケア」との対立によって明確になる。『ケアの哲学』のなかで提起される「ケア」とは、医療や福祉、行政サービスなどによってわれわれの生を維持し、「正常な身体」を維持させるものである。こうしたケアをめぐる様々な制度を通して、自己の身体は記録や数値などの集積体として可視化される。しかしながら、ケアは、時として、自己破壊への意志に支えられた自身の健康を損なうことを厭わない人間の振る舞いと対立――「攻撃的な自己肯定と制度としてのケアの間の矛盾」（92）――することもある。グロイスはこうした構造のなかで、攻撃的な自己肯定を「セルフケア」という概念と結び付け、「ケア」と対置させた上で、「セルフケアは現存在の基本的な存在様態である」（124）とし、生政治による管理を主とするケアよりもセ

ルフケアの方に大いなる健康の可能性を見出す。さらに、真の健康とは、セルフケアのなかでこそ実現されると言うのである。医療や技術によって身体を管理・維持するケアではなく、そうした制度を超えた自己破壊的なセルフケアによって、真の健康が獲得されるのはなぜか。グロイスの理屈はこうである。

> 実際ケアの制度の内部で生きることはまた、それらのために働くことを意味する。そしてそれらのために働くことは自分の職業を実践するだけではなく、キャリアを築き、制度のヒエラルキー内部でより多くのアクセスと権力を手にするために多くの労力を費やすことを意味する。それは疲弊する種類の仕事である。この意味において、メタの立場を探求することはより良い健康を探求することと密接に結びついている。〔……〕たしかに、ロゴスについて熟考することは緊急ではなく、常に次の瞬間には閉じる危険のある好機の窓にかわって、時間の圧力やストレスやヒステリーを生むことはない。そしてわれわれの心臓、新陳代謝、血管組織にとっていちばん悪いのは、まさにこの急かされる感覚である。(99-100)

すなわち、ケアによって構成される身体とは「労働する身体」、換言すれば、道具としての身体なのであって[7]、そうした労働の時間感覚から逃れることは「良い健康」の獲得につながる。あまつさえ、ケアの制度に逆らって自己の身体を毀損することは、人間の「もの化」を逃れる行為であり、自己破壊によって死に至ろうとも、それはわれわれが「単に労働する道具ではないことの重要な証し」(88) なのである。

以上のようにグロイスは、ケアとセルフケアを対立的にとらえ、論をすすめるわけであるが、書評子の関心をひいたのは、性別の取り扱いもまたケアの範疇に含まれる点である。

> もちろん、ジェンダーを変更することから、他の人々の目に映る私とは自分自身は実際には全く異なっていることを説明する本を書くことまで、

さまざまな方法で私は自分の象徴的身体を変えようと試みることができる。しかしながら、ジェンダーを変えるには外科医のもとに行かなければならないし、本を出版するにはそれらを編集者に提出して彼らの意見を求めなければならない。(15)

すなわち、われわれの性別もまた、ケアのシステムを通して象徴的身体を構成する一部として編成されているのであって、身体とは自己が自由に変えられるものではなく他者によって管理（＝ケア）されている。このグロイスの指摘は、トランスジェンダー研究の領域でゲイル・サラモンが提起した「官僚政治的なセックス」をめぐる議論と重なり合うものであろう[8]。サラモンによれば、個人の性別を決定する上で、髪型や歩き方、服装や身体的特徴こそが重要な役割を果たすのであって、性器は必ずしも決定的な意味を有していない。にもかかわらず、多くの場合、外性器の形状にしたがってパスポートや公的書類の性別欄が決定される――この意味で性別は、生物学的なものである以上に、官僚政治的な「書類業務（ペーパーワーク）」なのである[9]。この点については、グロイスも「私自身の身体はもはや私には属していない。生殖機能を含むその生理的な機能は、政治的な議論と官僚的な手続きの対象となる」〔傍点引用者〕(160) と述べており、われわれのもっともプライヴェートであるかのように思われる身体や性のあり方も、自己の意志で決定できるわけではなく、象徴的身体としてグロイスの言う「ケア」の対象なのである。

このように『ケアの哲学』は示唆に富む視点を提供する著作であるいっぽう、いくつかの疑問を生じさせる。それは、ケアを越えた、あるいはケアの外部に位置するセルフケアが果たして可能なのであろうかということである。言うまでもなく、医療や福祉、行政サービス、SNS などわれわれの象徴的身体を構成するケアのネットワークは、ありとあらゆる場所に張り巡らされており、その外部を想定することは困難を極める。グロイスはニーチェの思想を参照しつつ、「「超人」は偉大な健康の名の下に社会的ケアを拒否する」(65) と述べ、セルフケアの主体としての「超人」を想定するのであるが、このセルフケアがいかなる状況において具体的にどのように実現されうるかは、必ずしも

明確ではない。事実、グロイス自身も「しかし現実には、「超人」はまだなお制度による象徴的身体のケアに頼っている」(65) と留保をつけている。さらに、セルフケアという否定性の称揚は、自己破壊やその否定性に耐えうるだけの健常性を前提としているのではないだろうか。グロイスは、セルフケアの方に「新しい生の形式」(57) を見出すが、そのセルフケアの主体となり得るのは、自己破壊にも耐えうる頑強な身体をもった存在でなければならない。

以上のように、『ケアの哲学』は従来のケア論とは一線を画した異質なものであるが、本書で提示された「ケア」「セルフケア」「象徴的身体」といった魅力的な概念は、今後のケア研究においても参照されるべきものとなるであろう。

註

(1) キャロル・ギリガン (川本隆史、山辺恵理子、米典子訳)『もうひとつの声で:心理学の理論とケアの倫理』風行社、2022 年。

(2) たとえば、佐々木亜紀子、光石亜由美、米村みゆき編『ケアを描く:育児と介護の現代小説』七月社、2019 年;小川公代『世界文学をケアで読み解く』朝日新聞出版、2023 年など。

(3) ギリガン『もうひとつの声で』、84 頁。

(4) 以下、( ) 内の数字は、『ケアの哲学』の頁数を示している。

(5) 原語については、Boris Groys, *Philosophy of Care* (London, New York: Verso, 2022) を参照した。

(6) 福嶋亮大「「ケアの哲学」書評:依存と自律をいかに両立するか」https://book.asahi.com/article/14956912 〔2023 年 12 月 26 日最終アクセス〕

(7) もっとも、「ケアのシステムは、決して働くこともできず、決して将来において働くこともできないであろう身体をも包摂する」(152) と述べられているように、ケアが包摂するのは労働する身体のみではない。

(8) ゲイル・サラモン (藤高和輝訳)『身体を引き受ける:トランスジェンダーと物質性のレトリック』以文社、2019 年、292 頁。

(9) 同上、292 頁。